

一般社団法人日本社会福祉学会 第67回春季大会 報告

全国大会運営委員春季大会担当 大谷 京子（日本福祉大学）

大会テーマ : ソーシャルワークの価値再考—「個人の尊厳」の根拠をどこに求めるか—
開催日時 : 2019年5月26日(日) 13:00~17:00
開催場所 : 東洋大学白山キャンパス1号館3階1305教室

本来、春大会では「社会的アピールを込めた今日的テーマ」を取り上げるところですが、格差が広がり、排他的空気が顕在化している現在だからこそ、社会福祉学会としてあらためて「個人の尊厳」という根源的課題について議論したいと考えました。研究においても実践においても、社会福祉にとって「個人の尊厳」は前提とされており、その根拠を十分に探究してきておりません。実践においても、あなたの存在には価値がある、人生には意味があると、根拠をもって表現しなければいけない場面がありますが、私たちはまだ言葉を持っていません。

そこで、この難問について多領域から吟味し、ソーシャルワークの根幹を確認する場にしたと、シンポジウムを企画しました。

それぞれのシンポジストから報告の概略をうけ、コメンテーターの岩崎晋也氏(法政大学)が議論のポイントを、3点に絞ってくださいました。①現代社会において「個人の尊厳」を議論する意義、②「個人の尊厳」とは何か、③社会福祉において「個人の尊厳」を守るために何が必要かについてです。

1人目の片山善博氏(日本福祉大学)によって、哲学の世界での「個人の尊厳」の扱われ方について報告がありました。哲学史の中で、「尊厳」概念はあまり論じられておらず、哲学辞典にも項目として挙げられていないそうです。それでもカント、ヘーゲル、クヴァンテ、岡村重夫、レヴィナスらの議論を踏まえ、続くシンポジストお二人の報告への橋渡しもしてくださいました。さらに尊厳は、外在的・内在的という2つの根拠づけから、固有の他者性にこそ尊厳があり、共同性を原理とする在り方に根拠を求める一連の流れを示されました。

2人目の児島亜紀子氏(大阪府立大学)は、ソーシャルワークが尊厳の根拠を正面から問うてこなかったのは、それが自律する能力の有無という問題に通じる可能性があるからだを喝破されました。ソーシャルワークにおける、優生学に対する「戦い」と「親和性」という、相反する態度も提示されました。社会福祉に内在する選別主義に対する批判を反省的に取り込み、今後、反抑圧ソーシャルワークやフェミニストによるケアの倫理などから専門職として尊厳を守るためになすべき課題は多いと締めくくられました。

3人目の熊谷晋一郎氏(東京大学 先端科学技術研究センター)からは、尊厳概念を使って何を成し遂げるのか、効果から逆に思考すると、「暴力をなくす、正当化させない」ことになるとして、特に障害者に対する暴力に焦点を絞って報告されました。虐待については、被害者も加害者も、何らかのサポートの依存先が一部のモノや人に集中すると暴力に巻き込まれやすい現状を解説されました。市場が広がったときに圧倒的にサービス量が増えた例を挙げ、

ソーシャルワークでは、依存先の冗長性への重視（依存先として多様な選択肢の準備）が必要だと提言されました。

コメンテーターの岩崎氏から、それぞれのシンポジストへ、尊厳概念の有効性や、優生思想、社会正義との関連といった質問が投げかけられました。フロアからも多くの質問が寄せられました。

「個人の尊厳」を主張するためには他者の存在が必要になること、重視されるようになってきた「多様性」「共生」も、本来は自らを否定するという矛盾を抱える概念であることなど、興味深い知見が得られたシンポジウムでした。「個人の尊厳」も「共生」も、所与のものとして受け入れるだけでなく、葛藤も認識しながら社会福祉学の立場から検討し続けたいと思わされる機会になりました。